整理番号

ＡⅡ－４　　3580

標題名

稲虫防除俚諺

著者名

古市與一郎

製作年月

2012年3月

稻蟲防除俚諺

全

稻蟲豫防及駈除法の俚諺緒言

髓蟲の稻を害せるハ。唯白穗のみに止まらず。粃となり。實入りも惡しきと。亦此蟲の稻莖へ蝕入るに因れり。蓋其害たる甚大にして。白穗の幾倍なるを知るべからず。實に恐るべき害蟲なり。今其害の甚しき例を示さんに。髓蟲の雌蛾一ツを殺せバ。恰も收穫米七升八合九勺八才に對ふ。其計算ハ。髓蟲の雌蛾一ツに付き卵子百粒を産ものと見ればバ。其卵子孵化して。夏の土用前より害をなし。八月上旬頃より。其稻の莖の中にて蛹に化し。又同月中旬頃より。再び化して白蛾となる。内五十ハ雄。五十ハ雌とし。此雌蛾一ツに付き。各

百粒づゝの卵子を産附ろそーて。九月上旬頃より。其卵子孵化して。五千の蠹蟲となる。一ツに付き。各稲一穗づゝ害をなすとせば。則五千穗なり。一穗百粒と見積れバ。五十万粒なり。之を捌法六四八二七を以て除れバ。前に所謂米七升八合九勺八才となる斯の如き計算なるが故に。誌蟲豫防駈除に盡カーて。一ツの蛾をも。生ー置くことなく。目に觸れバ。必ず撲殺すべし。依て其經過の次第と。豫防駈除の方法に関る俚謳を作り。常に農家の婦女子をーて。田植臼擦り等に之を謡ハーめんとす

明治十九年四月下浣　古市與一郎誌

稲蟲豫防及駈除俚謳

古市與一郎 著

○稲の髄虫名はいろくで根むし心むし葉乃むし

○いねを害するその髄虫ハ少ゆハ稲株ヨリ始なこの

○ヨリやつなかぶ畔菓などに髄虫かくれて住と知る

○田畔路傍の枯草やくさ以ねを害するむしをせぎ

○虫害うけたるそれ稲ヨリハ葉乃代りに麦がよい

○むしをふせぐにや燕乃巣をばかけさせやんせ家毎に

○燕ハ農家の大事の多よ学木害するむしをとる

○五月頃にハぎいむしや葉のすで蛹となるヨいな

○根むし蛹となりたる後は種なく蛾と化て出る

○ねむしてふくハ羽たゝみ細々長さ五六分いろ志候し

○根むしてふくハ昼間ハ潜れ夜ハ飛びあるきたまをうむ

○ねむし蛾のかゝるゝかたち苗種口乾に竪にそふ

○根むしてふくハ見當りしだいひとつも殘さず殺さんせ

○ねむしの親ごよそのてふくハ何で小麦が蛾になろ

○蛾が出たれバ田畑の所々で焚火ともしびしるがよい

○ねむしふせぎのととしびだいハ多らいにこゞ入き油させ

○ねむし蚜のたまごを産むハすつハ平苗の葉表に

○ねむしたまごをつゞくる形ちもさ五六分すぐ一分

○根むしたまご結すじめハ黄いろ後に漸々黒くなる

○根せたまごを見付こならバその葉はこそりやきすてよ
○ねむしたまごのかいより虫ハ稲のまかまは中へづる
○根むし害するさかりはときハ夏の土用にづるの比
○いねは中まで根せハ化て二段目蛹となるといな
○二段目さなぎは化したるてふハ稲の葉裏にたまをうむ
○九月すゞめに根むしはたまごとれて再び虫となる
○二段目ねむしも初のごとくいね乃まこのまは中へづる
○まこのまのうちより根むしハくきのなかへ飲づり住といな
○茎は中まてねむしハずいをくらひのぼきバ穂ハ拈て
○拈穂のいなぐき髄せあまた居るを援ぬやきすてよ

○桂し稲莖ぬきとりせずバねむしや近くひろがるぞ

○みいり哉才に打こむ稲ハおよそ桂其の害と知れ

右俚謳三十首稿成るの際偶愛知縣三河國南設樂郡新城村大田金十郎氏来り余が家を訪れ之を一覧して左の二首を即吟せらる仍て茲に附記す

○苗の稲も燕にたらせ立てやらんせ為やすみ

○子と春家ハ屠金返し物の燕を大切ス

明治十九年四月廿一日御届
仝　年五月十五日出版
三重縣平民
著者兼出版人　古市與一郎
伊勢國河曲郡七宮村十番地
定價金壹錢